日本シェリング協会第31回大会　要旨集

2022年7月2日・3日（ハイブリッド）

対面会場：大阪大学・豊中キャンパス　法・経講義練（1・2番教室）

オンライン会場：Zoom

I　一般研究発表

一般研究発表１「シェリング・テュービンゲン時代のパウロ解釈」　茂牧人（青山学院大学・宗教学）

一般研究発表２「シラーはライフスタイルの哲学者か？　マザーン／リグルによる『美的教育書簡』再評価をめぐって」　田中均（大阪大学・美学）

一般研究発表３　発表者の都合により取りやめ

一般研究発表４　「メイヤスーVS アガンベン ――相関主義の側からの思弁実在論の検証」横道仁志（大阪大学・美学）

一般研究発表５　「マイケル・フリードとドイツ・ロマン主義ーーカスパー・ダーヴィト・フリードリヒの絵画における「後ろ姿の人物像」を中心に」　折居耕拓（大阪大学博士後期課程　美学）

一般研究発表６　「後期シェリングの『啓示の哲学』をめぐる「政治神学」的読解についての一考察」　中村徳仁（京都大学博士後期課程・哲学）

II　公開講演

「初期フィヒテの超越論的論証　――「人間精神が決して脱出できない循環」を読み解く試み――」嘉目道人（大阪大学）

III　シンポジウム

「対話形式の可能性」
菅原潤（日本大学）　シンポジウム趣意書

登壇者
加藤紫苑（京都大学）「シェリングの対話篇」
二藤拓人（西南学院大学）「書簡からフラグメントへ――近代の文字メディア文化における対話形式の条件」
戸谷洋志（関西外国語大学）「対話篇は対話の表現足りえるか？」

Ⅰ　一般研究発表

一般研究発表１

シェリング・テュービンゲン時代のパウロ解釈

茂牧人（青山学院大学・宗教学）

シェリングは、1790 年から 95 年までテュービンゲン神学校に在籍しいていた。そのテュービンゲン時代の様子については、これまで様々な研究者が論じてきた。フールマンスは、Schelling im Tubinger Stift Herbst 1790-Herbst 1795 において、当時の神学校のドイツの中での位置づけや、教員とその授業のタイトルを伝えているし、ヤコブスは、*Zwischen Revolution und Orthdoxie?* において、フランス革命の精神と神学校の先生がたなどの正統主義の態度のはざまにいた学生たちの様子を伝えている。特にシェリングの神学校時代の反抗的な態度について報告している。また、日本においても、既に久保陽一氏が、「チュービンゲン・シュティフトにおけるシェリング」 において、また菅原潤氏が、『シェリング哲学の逆説』 の第 1 章の中で、上記以外のドイツの文献も使いながら、当時のシェリングや神学校の様子を伝えている。また、1792 年に執筆された修士論文をめぐる状況については、松山壽一氏が、『人間と悪　処女作『悪の起源論』を読む』で、また山口和子氏が、『未完の物語　―シェリングの神話論をめぐって―』で詳述している 。

しかるに、近年歴史・批判版のシェリング全集の出版が相次ぎ、特にシェリングのこの時代の聖書解釈などについての原稿が、その中に収められるようになった。その中には旧約聖書や新約聖書の福音書についての注釈書もあるが、今回は、特に、ロマ書註解 とガラテヤ書註解 という新約聖書の書簡の註解を取り上げ、シェリングのパウロ解釈について詳らかにしようと思う。というのも、この二つの書簡の註解については、既にヘンリッヒの *Hegel im Kontext* において、またザントキュラーの編集した *F. W. J. Schelling* において言及されている。また近年アーノルトが、*Schellings frühe Paulus-Deutung* (Schellingiana 29) などにおいて、この二つの書簡の註解について詳しい論述をしており、そのパウロ解釈の重要性が明らかになっているからである。

この時代は、ドイツでは、カントの哲学が圧倒的に席巻しており、若い神学生たちは、それに熱狂していた。それ故その聖書解釈も、啓蒙主義の、とりわけカントの『実践理性批判』や『単なる理性の限界内の宗教』 （『宗教論』と略記）などの影響下で、展開していく。従ってまず、第 1 節では、神学校時代のカントの影響についてと、カントの宗教論の影響下での聖書解釈について整理する。さらに第 2 節においては、シェリングのロマ書註解とガラテヤ書註解のパウロの自己理解や、その当時のパウロの論争の様子を記述しながら、そのパウロ解釈における重要概念は何かという点や、その聖書解釈が、カントの理性限界内の聖書解釈からどのような影響を受けて、どのような主張をしているかを詳述する。結びで、それが、その後のシェリング哲学へ影響を与えたかを詳らかにしたい。

一般研究発表２

シラーはライフスタイルの哲学者か？　マザーン／リグルによる『美的教育書簡』再評価をめぐって

田中　均（大阪大学・美学）

本発表は、フリードリヒ・シラーの『人間の美的教育についての書簡』（1795 年、以下『美的教育書簡』）についての近年の解釈を取り上げて、その背景と妥当性およびその意義について検討する。本発表で取り上げるのは、サマンサ・マザーンとニック・リグルが British Journal of Aesthetics に寄稿した共著論文「シラーにおける自由と美的価値」である（第一部 2020 年、第二部 2021 年）。

『美的教育書簡』においてシラーは、美を人間の形式衝動と素材衝動とを統一する遊戯衝動の対象として規定し、「人間が完全に人間であるのは、遊ぶときのみである」（第 15 書簡）と述べる。シラーはさらに、「人が自由へと至るのは美を通じてのみである」（第 2 書簡）と述べ、また「美だけが人間に社交的性格を与える」（第 27 書簡）とも主張する。マザーン／リグルは、こうしたシラーの議論を、「美的価値」が個人としての自由と政治的自由の両方を可能にするという議論として解釈し、それによって、シラーの議論は現代美学における美的価値を巡る論争に寄与しうることを主張する。

このようにマザーン／リグルによる解釈は、シラーの議論の現代的意義を主張するものであり、そのためにシラーが用いるいくつかの概念を独自の仕方で理解している。例えば、マザーン／リグルはシラーのいう「遊び」とそれがもたらす「美的自由」とを、衝動の理論に基づいて理解するというよりも、人間がふだん従っている制約から離れて行為する「意志的開放性」の状態に至ることとして理解する。また、シラーが美について論じる際に用いる概念である「生きた形式」および「美的仮象」を、マザーン／リグルは「スタイル」（様式）として理解するように提唱する。そしてそれに基づいて、シラーが論じる、美によって可能になる社会性（「美的国家」）を、通常の制約にとらわれない自己表現を自分にも他者にも可能にするような相互作用の関係として再構成する。

このようにシラーの美と自由についての議論に独自の解釈を施したうえで、マザーン／リグルが行う主張とは、現代の主流の美的価値論が、個人の鑑賞経験における（対象の形式から得られる）快感情を美的価値の基準とみなしている点で快楽主義的、形式主義的であるのにたいして、（自己と他者の「意志的開放性」としての「美的自由」を志向する）シラーの議論は、その対案になる非−快楽主義的・行為志向的・共同体主義的な美的価値論であるというものである。

本発表は、まず現代の美的価値論をめぐる論争と近年の『美的教育書簡』の解釈の状況をふまえたうえで、マザーン／リグルの独自の解釈の妥当性を検証する。とくに、シラーの美の理論を、非−形式主義的な「スタイル」の理論として読解することは可能か否かが

問題となる。こうした検証に基づいて、最後にこの解釈の美的価値論としての意義を指摘する。

一般研究発表４
メイヤスーVS アガンベン ――相関主義の側からの思弁実在論の検証

横道仁志（大阪大学・美学）

本発表ではクァンタン・メイヤスーの思弁実在論（思弁唯物論）について、彼の批判対象たるポストモダン思想からジョルジュ・アガンベンを取りあげたうえで、この両者の議論の比較検証を試みる。

メイヤスーがカント以後の近現代哲学の思潮を「相関主義」と定義して、総括的な批判を行った事情はよく知られている。しかしまた、メイヤスーは単純にカント以前の素朴実在論に回帰するのではなく、（強い）相関主義の主張――人間は思考の相関物しか思考できないので、この循環の外部については語るのは無意味である――が極めて強固であると認めつつもむしろこの論法を徹底する先に、あらゆるものを別様に思考できる可能性＝事実論性を発見することで、相関主義の克服を図っている。

この立論に対しては、さまざまな論者からメイヤスー自身が観念論にはまり込んでいるとの批判が寄せられてきた。例を挙げると、同じ思弁実在論の立役者グレアム・ハーマンは、観念論者も相関主義者も「物自体」を認めない点で変わらないのなら、観念論者の独断論を避けるために相関主義者は事実論性を承認せざるを得ないという筋書きそのものが失効すると指摘している。また、分析哲学者パスカル・アンジェルは、「思考だけが絶対者に到達する」というメイヤスー自身の発言を逆手にとりながら、どうしてその絶対者が思考の外部に実在すると結論できるのかと挑発している。以上の批判に対して、本発表ではメイヤスーの議論を誤謬論として棄却するのではなく、可能なかぎりその内的論理に即しながら――観念論者と相関主義者は区別できるし、思考の外部についての思考はありうる――その有効性を検証する。そのために参照するのが、アガンベンの仕事である。

このふたりは、共通の主題群（人間以前／人間以後の時間、確率、潜勢力 etc.）に関心を寄せているという事実以上に、相関主義の思考法を通して相関主義からの脱出を目指すという問題意識において一致している。もっとも、「実在へのアクセス」を放棄するという点で、アガンベンがポストモダンの立場に留まり続けているというのも事実である。しかしまた、アガンベンの諸研究に照らすなら、メイヤスーの議論が観念論との批判を免れない理由

について、おそらくより明晰な理解が可能になる。この作業は、メイヤスーの思弁実在論をより広汎な哲学史のコンテクストに接続することにもなるだろう。

一般研究発表５　マイケル・フリードとドイツ・ロマン主義――カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの絵画における「後ろ姿の人物像」を中心に

折居耕拓（大阪大学博士後期課程　美学）

本発表では、戦後のアメリカを代表する美術批評家にして美術史家であるマイケル・フリード（Michael Fried, 1939-）の美術史研究のうち、とりわけ彼による画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ（Caspar David Friedrich, 1774-1840）の絵画の読解を分析することによって、彼の近代絵画史観におけるドイツ・ロマン主義の芸術の位置を明らかにする。

1960 年代においてモダニズム絵画の批評から出発したフリードの仕事は、その後、18、19 世紀のフランスの絵画と批評に関する歴史的研究から、現代芸術写真やカラヴァッジョの絵画の検証にいたるまで、対象の時代と地域を拡張しながら現在まで展開してきた。

フリードの美術史的著作に関するこれまでの研究は、彼がドゥニ・ディドロの芸術論の読解から導き出した 2 つの概念、すなわち「没入」(absorption) と「演劇性」(theatricality) のあいだの相互関係に焦点を当てる傾向にある。ただしフリードは近年、ディドロ以来のフランス絵画の伝統と対照されるものとして、19 世紀に生み出された他の地域の芸術作品を読解しており、それによってみずからの絵画観を刷新している。

こうした彼の仕事の展開を踏まえて、本発表では、論考「絵画における方向づけ」(2014) の内容を中心に、フリードリヒの風景画、とくにそこで描かれる「後ろ姿の人物像」（Rückenfiguren）に関するフリードの読解について検討する。そこで強調されるのは、フリードが、フランス絵画における没入的人物像と、フリードリヒの絵画における人物像とのあいだに、まったく異なる種類の「見る主体」の代理を見いだしているということである。

具体的には、第 1 に、ディドロの時代を代表する画家シャルダンの作品に典型的に示される、没入する者としての後ろ姿の人物像について論じる。第 2 に、フリードリヒの《朝日の前に立つ女性》(1818 年頃）および《窓辺に立つ女性》(1822 年）における左右対称の構図に関するフリードの解釈について検討する。フリードは、見る行為がその中心に位置づけられたこれらの絵画の画面を、「主観における方向づけのアレゴリー」として読解する。第 3 に、シャルダンとフリードリヒの両方の絵画における後ろ姿の人物像を比較しながら、フリードが後者の人物像を、ディドロの時代に確立された「観者」(beholder) の概念ではなく、「認識者」(cognizer）というもうひとつの概念によって捉えていることについて論じる。このように見る者の概念に関して示された差異から、フリードの独自のロマン主義絵画観を浮き彫りにすることが本発表の狙いである。

一般研究発表６

後期シェリングの『啓示の哲学』をめぐる「政治神学」的読解についての一考察

中村徳仁（京都大学博士後期課程・哲学）

本発表は、ここ数年で英語圏を中心に興隆をみせている、シェリング哲学を「政治神学」的に読解する試みに寄与することを目的としている。こうした研究動向を牽引する人物としては、『メシア的時間』の著者で中・後期シェリングの仏訳者でもあるベンスーサン Gérard Bensussan や、その弟子であるダス Saitya Brata Das、さらにはダスの研究に積極的に応答しているミグラーSean McGrath などの名前が挙げられる。なかでも画期となったのは、ダスの著書『シェリングの政治神学』(2016 年）である。

ダスはその著のなかでシェリングを、ヘーゲルやＣ・シュミットの「政治神学」とは一線を画する、別の「政治神学」の系譜に位置づけている。ダスの枠組みにおいて、ヘーゲルたちの潮流は、現行の秩序や政治体制を揺るがす危機や例外状態を、その秩序の延命を正当化するためだけに専有する「内在形而上学」にとどまっているが、それに対して、シェリングは、現行の秩序が動揺する例外状態そのものをまったきカオスとして、主権の正当化には専有されないかたちで思考しようとした、稀有な思想家であるとされる。

本発表において報告者は、ダスの構想や方向性には或る程度同意はするものの、『啓示の哲学』にかんする読解については多少の留保を加えたい。ダスは『啓示の哲学』を読み解くに際して、主権の正当化には回収されない政治批判的な志向を、「理性からの脱自」といった消極哲学への批判に重ねているが、報告者はむしろ、シェリング哲学のなかにある＜政治からの解放＞のモチーフを、『啓示の哲学』のなかに同時にみられる「理性の再起」の発想のほうに見い出す。

II　公開講演

初期フィヒテの超越論的論証
――「人間精神が決して脱出できない循環」を読み解く試み――

嘉目道人（大阪大学）

フィヒテが自身の哲学である「知識学」について初めて論じた著作は、1794 年の『知識学の概念、あるいはいわゆる哲学の概念について』(以下、『概念』）である。「知識学」という命名がなされたのはこの『概念』においてであり、知識学およびその原則の必要性も、同書において初めて論じられる。その正当化は、学問（ひいては人間の知）が一般に根拠をもつか否かをめぐって行われるもので、以下の二つの命題からなる論証として再構成できる。

(1) もし人間の知が根拠をもつべきならば、知識学の原則が存在しなければならない。
(2) もし知識学の原則が存在するならば、人間の知は根拠をもつ。(Vgl. *BWL*, GA I/2, 117, 133)

一見すると、これらの命題だけからでは、知識学の原則が存在することも、人間の知識が根拠をもつことも帰結せず、何の正当化にもなっていないように思える。実際、フィヒテはこれを「人間精神が決して脱出できない循環」(133)だと認めている。

しかしながら、果たしてこれは本当に循環なのか、また循環であるとすればどのような循環なのかは判然としない。なぜなら、条件文(1)には、(2)とは異なり「……べきである(sollen)ならば、……でなければならない(müssen)」という様相表現が含まれているからだ。同様の表現は他の著作でも見られ、後に主題化もされている(vgl. *WL1804II*, GA II/8, 250ff.)。それゆえ、『概念』におけるこの「循環」を考察することは、イェーナ期とベルリン期とを通したフィヒテ知識学の全体像を把握するための手掛かりともなりうるだろう。

本講演では、この「循環」を、二つの三段論法から成る特殊な超越論的論証と見なす解釈を提案する。なお、本講演の内容は日本フィヒテ協会第36回大会で行った口頭発表の内容を元にして、さらに考察を深め、改訂したものである。

III　シンポジウム　対話形式の可能性

シンポジウム趣意書

菅原潤（日本大学）

哲学と言えば一人の人間が難解な用語を駆使して独力で膨大な著作を書くというイメージが一般的だが、周知のように最初のまとまった哲学書を著したプラトンは、ソクラテスを主人公にした対話篇を幾つも書き、書名にはソクラテスの論敵となる相手の名前を記すことが多かった。このことは一体何を意味するのか。もちろん著者のプラトンは、最終的に議論の軍配を自身の師であるソクラテスに上げるのだが、その議論にたどり着くまでに論敵の力はどうしても必要であり、言うならば論敵に一定の敬意を示すためにその名を書名に戴いたのではないのか。つまり哲学において適切な議論を引き出すためには、対話する相手が必要なのである。そうした事例は古代ギリシア以後も幾つか見出すことができるが、対話形式を取り入れた著作を比較的多く著したのがシェリングだということに注目したい。相手側の返信こそないが、対話相手を想定した書簡を並べる構成をしているものも含めれば、初期の『独断論と批判主義に関する哲学的書簡』と同一哲学期の『ブルーノ』と後期の『クララ』などがこれに当たる。

なぜシェリングには対話形式の著作が多いのか。これにはドイツ観念論とロマン派初期の論者たちの交流が大きいと思われる。ドイツ観念論の形成に大きな影響を与えたものとしてカントの『純粋理性批判』の刊行とともに、ヤコービがレッシング思想の評価をめぐってモーゼス・メンデルスゾーンと論争した足跡をまとめた『スピノザに関する書簡』が挙げられる。ロマン派に先行する古典主義の両巨頭であるゲーテとシラーにも、それぞれ『若きウェルテルの悩み』や『美的教育に関する書簡』があり、広い意味でロマン派に分類されるフリードリヒ・シュレーゲルやヘルダーリンにも、それぞれ『詩についての対話』や『ヒュペーリオン』がある。他にも音楽と絵画にまつわる対話形式の作品が幾つか見受けられる。

この二年ほどわれわれはコロナ禍における自粛を強いられモノローグ的な思考に没頭してきたが、ある意味で人類の全体が沈思黙考を経たうえで対話に臨むという地点に立っている。こうした哲学の歴史、あるいはロマン派芸術の歴史を踏まえたうえで、いかなる対話形式が可能でありまた望まれるかについて、加藤紫苑氏と二藤拓人氏からそれぞれのご専門のシェリングとシュレーゲルの立場からご発言いただき、そのうえで現在の哲学対話の名手として名高い戸谷洋志氏を迎えて討議してゆきたいと思う。

シェリングの対話篇

加藤紫苑（京都大学）

プラトンやニーチェのように名前を聞けば、すぐに特定の著述スタイルが思い浮かぶ哲学者がいる。パスカルやスピノザのように、主著の印象があまりに強烈なので、複数の形式で著述しているという事実が霞みがちなケースもあるだろう。ではシェリングはどうだろうか。内容そのものの理解に気をとられて普段は意識しないが、シェリングの書き残したものを通覧すると、その著述形式が多岐にわたっていることに改めて驚かざるをえない。カント・フィヒテの超越論的哲学という最先端の著述形式を出発点としながら、それにとどまることなく、（架空の）書簡、幾何学的叙述、対話篇、断章（アフォリズム）などの諸形式が試みられ、その間に（解釈学的）注釈、講演、詩などの諸形式が挟みこまれていく。ただシェリング自身は、哲学のあるべき姿として早くから「新しい神話」という理想を掲げ、しかも『諸世界時代』のプロジェクトと共にその実現を断念せざるをえなかったことを思うと、叙述形式の百花繚乱も、理想への途上に位置する暫定的なものであることに気づかされ、どことなく色褪せて見えなくもない。本提題では、このような「新しい神話」の理想（とその断念）という大きな見取り図の中で、さまざまな叙述形式の一つである対話篇に特に注目し、この著述形式がシェリングにとってどのような意味を持っていたのか、ということを反省してみたい。シェリングの対話篇は三つある。一八〇〇年代の初め、同時期に執筆された『ブルーノ』と「絶対的同一性の体系と最近の二元論との関係」、さらにその十五年以上も後に

書かれ、未完のまま残された『クララ』である。大雑把に言えば、『ブルーノ』から『クララ』へと至る対話篇に関するシェリングの理解の変遷を辿る、というのが、本提題の主な内容になるだろう。しかしその際、この期間に行われているシェリングの発言――対話篇を主題とした散発的で断片的なもの――に基本的に依拠しながらも、同時に『クララ』の〈対話についての対話〉という一面にも光を当ててみたい。

書簡からフラグメントへ――近代の文字メディア文化における対話形式の条件

二藤拓人（西南学院大学）

本発表では初期ロマン派の機関誌『アテネーウム』に掲載されたアフォリズムの著作、例えば代表作の「断章集」(Fragmente, 1798) が、書簡体の小説や哲学・美学的著作に比べて、テクストの対話者たる読者に対してより開かれた哲学対話の場を提示していることを論じる。ここでいう「開かれ」の具体相を明らかにするために、「断章集」の活字紙面から、副題や通し番号はおろか、隔字体、感嘆符、疑問符などの操作記号も周到に取り除かれている点に着目したい。そしてこの特徴が同誌の編集・校正を主導したフリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）の指示に基づいていることを、往復書簡や遺稿資料から裏付けたうえで、彼の編集方針の狙いを考察する。

例えばシュレーゲルは、書き手による表題設定や語句の強調が、読み手をある特定の意図へと誘導し、予め思考を制限してしまう「教育的な」補助手段であると捉えこれを採用しなかった。かくして複数のフラグメントはそれぞれの言表に優劣のないフラットな活字体裁を取り、それゆえに読解の手掛かりが極端に省かれた状態で、差し当たりは解釈困難な〈他なるもの〉として紙面上に現れる。しかしこの散文群を受け手が自由に読み、なおかつその中で自ら「下線を引く」ときに、はじめてその読者に固有の「対話」対象が浮かび上がる――このような仕組みをシュレーゲルが断章形式において企図していた、というのが本発表で示したいテーゼである。

以上の論述との関連で、一般に哲学対話の名のもとで想定される著述事例が、実は根本的にはモノローグ（自己対話）の閉域にとどまってはいないか、という趣旨の次のような批判的な問いも提起し、シンポジウム全体の討論のたたき台としたい――プラトン対話篇はソクラテスとその論敵との対話の文字記録にすぎず、読み手はそれを傍観した立場から追体験するしかないのではないか？ 書簡体の著述では、書き手がみずからのうちに内面化された受け手とともに書き、受け手は自分に宛てられた書簡であるかのように書き手の意識を内面化して読む、という近代的な解釈行為のプロセス（Kittler 1980）が前提とされた形式にみえるが、それは開かれた対話といえるだろうか？

対話篇は対話の表現足りえるか？

戸谷洋志（関西外国語大学）

対話を作品することは、あるジレンマを抱えている。対話とは複数の人間による意思疎通である。「私」が誰かと対話しているとき、その誰かは「私」ではなく、他者である。それが他者である以上、他者が「私」に対して何を語るのかを、「私」が制御することはできない。もしそうした制御が可能であるなら、そこで語っているのは「私」だけであり、それは対話ではなくモノローグになってしまうだろう。しかし、対話を文芸において作品化するとき、その作者は「私」だけである。「私」は、作品のなかで、あたかも互いに他者であるかのように振る舞う登場人物を出現させ、互いに互いを制御することのできない対話を演じているかのように表現するが、それぞれの登場人物が語ることは、すべて「私」が構想し、登場人物に語らせていることである。そうであるとしたら、その作品のなかで演じられる対話は、対話足りえているのだろうか。もしもそれが対話足りえないのだとしたら、対話篇と呼ばれる作品は、常に対話ならざるものの表現に過ぎないのだろうか。

発表者は、2016 年に公刊した著作『J ポップで考える哲学』を、一つの対話篇として構想した。その際に、常に苦心していたのが、そのなかで表現される対話を、いかに現実の対話へと接近させるのか、読者に対して対話としての説得力を表現していくのか、ということであった。それは、結局のところ、上述のような問いにどのような態度を取り、またその困難さをいかに乗り越えるのか、という問題に帰結する。本発表では、『J ポップで考える哲学』の執筆時の経験を踏まえながら、対話篇の製作が直面する根本的なジレンマに対して、その克服への道筋を考察する。